藤原与一先生著

『昭和日本語方言の記述
―愛媛県喜多郡長浜町櫛生の方言―』
（『昭和日本語の方言』第Ⅰ巻）

著者藤原与一先生は、かねて、「方言は生活語だ。」とおっしゃっている。本書は、その、「昭和日本語生活」の記録の初巻である。

先生の方言研究―日本語研究―の足跡は、『日本語方言文法の研究』（昭和24年　岩波書店）、『方言学』（昭和37年　三省堂）、『方言研究法』（昭和39年　東京堂出版）、『日本語方言文法の世界』（昭和44年　塙書房）、『方言研究の回顧と展望』（方言研究叢書1）（昭和47年　三弥井書店）などの高著に明らかである。そして今、ここに、『昭和日本語方言』という、一大共時態記述の緒につかれたわけである。

私は、この調査の全結果を統一的に修録して、昭和日本語の一記録を成就していきたい。私としては、これが、国語史の今日に生きる者としての、国語研究の責任のはたしかただと考えている。（本書「刊心の心　五」より。）

これらの調査・研究が、どれほどのきびしい精神と深い思索とに支えられてきたものであるかは、あとに御紹介する『方言の山野』によってもうかがい知ることができる。

本書の内容は、

Ⅰ　発音　Ⅱ　文法　Ⅲ　語彙

の三部から成り、各々について、徹底した微視（―分析）が、「方言は生活語」「人間の学としての方言学」という巨視（―国語観、言語哲学）によって統合された、結晶的とも言うべき記述研究となっている。

本書は、叢書全二十一巻の首巻に当たり、今後、年序を追って、「全国五十余地点方言精査」の全成果を公刊される御予定である。

第二巻　四国要地方言編　二　（高知・徳島・香川）

第三巻　瀬戸内海要地方言編　（山口・岡山・兵庫）

第四巻　中国要地方言編　一　（山口・広島・岡山）
第五巻　中国要地方言編　二　（島根・鳥取）
第六巻　九州要地方言編　一　（大分・宮崎・鹿児島）
第七巻　九州要地方言編　二　（福岡・熊本―二地点）
第八巻　九州要地方言編　三　（佐賀・長崎―二地点）
第九巻　近畿要地方言編　一　（兵庫・京都・福井）
第十巻　近畿要地方言編　二　（大阪・和歌山・奈良）
第十一巻　近畿要地方言編　三　（三重―三地点）
第十二巻　中部要地方言編　一　（愛知・滋賀・岐阜）
第十三巻　中部要地方言編　二　（福井・石川―二地点）
第十四巻　中部要地方言編　三　（富山・新潟・長野）
第十五巻　中部要地方言編　四　（山梨・静岡―二地点）
第十六巻　関東要地方言編　一　（神奈川・旧東京市・埼玉・群馬）
第十七巻　関東要地方言編　二　（千葉・栃木・茨城）
第十八巻　奥羽要地方言編　一　（福島・山形・宮城）
第十九巻　奥羽要地方言編　二　（岩手・秋田）
第二十巻　奥羽要地方言編　三　（青森―二地点）
第二十一巻　資料索引

これら一大記述作業完結の暁の光明は、先生の左のおことばに啓示されていよう。

資料本位の記述の続行完結が、昭和日本語の客観的記録の成就となる。生きた資料のみずから語る記録は、まさに昭和日本語の歴史的な記録である。

巻を追うての記述の進行は、また、どのような言語理論の開発を可能ならしめるか。前途に、日本語による言語学の光明があると言える。（本書「結語」より）

（昭和48年4月刊　三弥井書店　定価一六〇〇円）

（佐々木　峻）